

日本IT書紀

029 和洋折衷

03 未剖篇
卷之四 曙光

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第二十九

和洋折衷

一

文化が伝わり根付くということは、そうそう生易しいことではない。モノが存在するということと、人がそのモノの意味を理解し、再生産するということは違う次元の話である。

例えば土器。

側面にこびついていた煤の放射性炭素測定で、BC一〇〇〇年プラスマイナス一〇〇年という結果が出た土器があった、とする。放射性炭素測定というのは、「C14」と呼ばれる炭素の同位元素が五千五百六十八年で半減する原理を応用するのである。炭化した穀物、木片、煤(すす)などに適用して、年代をさかのぼる。

実際、二〇〇三年の十二月、西日本各地の縄文時代後期から古墳時代前期および、韓国南部の無文土器時代の遺跡で発掘された土器に付着していた炭化物六十九点、炭化米二点、漆二点、建物柱七点など計八十点以上に対して、そ

のような総合評価が与えられた。

調査に当たったのは国立歴史民俗博物館である。

——測定値が正しいとして。

というのは、保存施設が不十分だと出土物が現代の空気中に含まれる炭素を吸収してしまうからである。おのずから放射性炭素測定の結果に重大な誤差が出る——可能性がある。

博物館は記者を集めて会見し、

「北部九州の弥生早期の始まりは、前一〇世紀、弥生前期の始まりは前九世紀末から前八世紀前半、中期の始まりは前四世紀前半である。四国の弥生前期は、前九世紀末から前八世紀前半以降で、北部九州より若干遅れる可能性もある」

と発表した。

同博物館は日本古代史学に一時代を築いた井上光貞、東大名誉教授の遺志を受け継ぐ権威ある研究機関なので、国が検定している教科書の記述にも影響を与える可能性がないでもない。

ただ、その発表には異論が存在する。

「弥生」

という雅やかな名を持つこの時代は、土器の形状と文様を指標にして編年が形成された。ところが、当時の社会を

再現する総合的な評価に用いられるのは、土器のみではないのである。

利器において石器、木器、金属器があり、埋葬方式に支石墓、甕棺墓、土壙墓があり、装飾品に貝釧、勾玉、ビーズ、黄金などがある。食生活においては水田耕作によるコメばかりでなく、粟の栽培が知られる。

つまりコメというのは、時代を表徴するファクターの一つに過ぎない。

このようにいうと、読者の中には

「教科書で習った日本史では、水稲耕作をもって弥生の始まりとしているではないか」と反論する向きもあるに違いない。

しからば、炭化米を伴出した最も古い生活遺跡が青森県に存在し、縄文時代のコメが確認されているという事実をどのように説明するかである。もし水稲の出現を条件とすれば、青森県は紀元前七世紀に弥生時代を迎えていたことになる。

本書が主とする目的はそれを論じていることではないが、同博物館は結論を急ぎ過ぎた。コメの栽培を縄文時代にさかのぼらせるか、従来の「縄文後期」を「弥生早期」に変更するかという論議が成されなければならなかった。

そのことはこれ以上、問わない。

二

筆者がここで語りたいのは次のようなことである。

第一に、短粒米（ジャポニカ種）の発祥地である中国江南地方との地理的關係を考えれば、有明海沿岸の一角に水稲耕作の技術を持つ人々が上陸し、村落を形成していたとする同博物館の発表は、まったく無理がない。というより、わざわざ記者会見を開いて「発見」を報告するまでもなかった。

第二に、水稲耕作の場合、まず種籾がなければならぬ。だけでなく、田を作る場所の選定、水の引き方、畦の作り方、水温の管理、病気や害虫の駆除、収穫の仕方、脱穀の方法、さらに調理の仕方など、技術と道具が伝わらなければならぬ。

第三に——これが最も重要なのだが——、コメを食べるという習慣ないし思想、生活様式が伝わらなければならぬ。

青森県にも紀元前七世紀にコメが存在したが、畦（あぜ）道によって区切られ、そこに用水が引かれた水田が津軽平野に出現するのは紀元前後である。九州島の西北端に発した弥生の文化が本州島の北端まで、約二千キロの距離を行

くの千年を要した。第五「千年の時空」の章で論じたこととやや重複するが、古代というのは何ごとにつけ、時間がゆったり流れていた。

なぜか。

要するに文化の伝播とは、人の移住だったからである。

集落の拡大と家族の膨張で、分割・分家が起こり、独立した集団が新たな土地に水稲を営んだ。つまりは「世代」というものが、伝播に要する時間軸の単位だった。

初期において、金属器や装飾品などは、大陸や半島から「完成品」がもたらされたに違いない。それが緩やかで少数の人の移動によったものか、それともある程度組織的な集団の移動であったかという疑問に対して、一定の解釈を与えるのは弥生式埋葬遺跡から発見された人骨である。

その詳細な計測結果によれば、答えは後者ということになる。

黄金の冠をかぶり、青銅の剣や矛を備えた集団が上陸し、そこに住んでいた人々を駆逐し、独自の集落を作るようなこと——騎馬民族征服王朝説——は、いまだに有効であるかもしれない。そのうち銅や鉄の原材料を仕入れ、列島の中で鑄造するようになった。最初は「模造」であり、次に「模倣」が始まり、技術の習得とともに独自の技術で製造が始まる。

先進の文物が請来されたとき、必ず旧の文化との間で摩擦が生じ、戦闘が起こる。仏教が伝わってこの列島に宗教改革が起こったとき、旧勢力を代表していた葛木、巨勢、物部といった氏族が減び、蘇我、中臣、大伴といった土族が興隆した。幕末維新の混乱というのは、別の見方をすればその一つであるに過ぎない。

明治初期に起こった土族の反乱とされる神風連の乱（一八七六年十月二十四日）、秋月の乱（同二十七日）、萩の乱（同二十八日）、西南の役（一八七八年二月〜九月）などは、幕末維新の動乱に幕を下ろした戦いであった。

明治政府が最初に取ったのは「模造」である。本質は丁髷と二本差しの時代と変わっていないけれど、外見だけは「西洋」にしようと思えば考え、頭を散切りにし、行灯の代わりにランプを灯し、羽織・袴を洋装に改め、「西洋」の銃や時計や茶器を用いた。見よう見まねで田中久重が蒸気機関を作り、川口市太郎が三輪自転車を作り、その行き着いたところに「鹿鳴館」があった。

次いで模倣が始まった。

模倣とは、形ばかりでなく、精神の一部もそれに近似して初めて成立する行為である。つまり模倣には思想が必要であった。中村正直や福沢諭吉はその役割を担った。実をいえばここにおいて、日本は「和洋混交」の時代から脱し、

いわゆる「和洋折衷」の時代に移行していく。西暦でいえば一九〇〇年が一つの境目であるかもしれない。

三

「明治二十二年一月卅日印刷、二月一日発行」

の年紀を持つ「東京名勝吾妻橋鉄橋之真図」と題した錦絵がある。発行者は「日本橋区馬喰町二丁目十四番地、綱島亀吉」とあって、桜の花が咲き誇る隅田川にかかった国内初の洋風鉄橋「あづまばし」を行き交う人々の姿を描いている。

向こう岸に「吉原」、「富士縦覧所」、「金龍山」の文字が見える。金龍山というのは浅草寺のこと。

橋の下には俵を山積みにした船が行き、橋の両脇にガス灯が立っている。シルクハットの御者が鞭を振るう二頭立ての馬車や洋傘を差した丸髻の婦人を乗せた人力車が走り、かと思えば頭から爪先まで、鹿鳴館風の洋装の母娘連れがいる。

その近くに立ち止まって話をしている二人の男性を見れば、菅笠をかぶり、丁髻に脚半と、そのままの姿で東海道中膝栗毛に出てきてもおかしくはない。やや向こうに目を転じれば、羽織袴に山高帽、警官のそばに立つ少女は洋風

の帽子に振袖、足元は革靴とおぼしい。

絵そのものが和洋混交、和洋折衷の中間点にある。

これがあと十年もすると、丁髻の男性はほぼ姿を消し、都市部で男性会社員が外出する際は背広、カンカン帽に革靴、商家の奉公人は和服、鳥打帽に雪駄か下駄という姿が一般的になる。

農村部や地方都市で名士は羽織に山高帽というのが、公式の場に出席する際の服装だった。ただし女性は、都市部でも農村部でも相変わらず丸髻、島田に和服という姿が一般的だった。

NHKが一九六六年四月から一年間、朝のテレビ小説と銘打って土曜と日曜を除く毎朝、十五分間放送した『おはなはん』は、そういう時代を生き抜いた女性の半生記を描いている。

檜山文枝演ずるところの『おはなはん』は、矢継の和服に袴の姿で自転車に乗る。ちよつとはねつ返りなハイカラさんというのは、夏目漱石が『坊ちゃん』で描くところの『マドンナ』も、その一人とわかっていい。

このころの世相を揶揄した風刺画「日本人の二重生活」が面白い。

描いたのは北沢楽天という人であった。

「日本人の二重生活」が揶揄するのは、

・ 結婚式で新郎はモーニング、新婦は文金高島田。神前で式をあげ披露宴はホテルで洋食。

・ 小学校ではローマ字を教えながら、子供たちは難しい仮名遣いを覚えなければならない。

・ 来客を畳の間に置いた椅子に据わらせ内儀が畳に三つ指を付けて迎える。

・ 女学生は矢絣の和服の上にスカートをはき、髪を丸髷風に結び上げて足元はブーツ。

・ 宴会は背広姿で座布団に座り、前に置かれた膳で食する。

等々である。

外出のときは洋服だが、帰宅すると和服に着替えるというのが、この時代の勤め人の一般的な生活スタイルだった。和洋折衷が日常の生活に浸透したのは大正に入ってから——西暦一九一〇年代以後——である。東京や大阪の急速な都市化が、新しい文化のかたちを生み出したといっている。

一九一四年、東京の銀座に三越百貨店の新館がオープンした。そのビルの模型を手にした赤坂の芸妓・万龍を描いたポスターが

「今日は帝劇、明日は三越」

というキャッチコピーを生み出した。

ややのちの統計だが、銀座の町を歩く女性の服装、髪形などを調べた記録が残っている。青森県生まれの建築学者、風俗研究家である今和次郎が一九二五年に行ったもので、東京美術学校を出た建築の専門家でありながら、新渡部稲造、柳田國男と交友し、各地の風俗を見て歩くのが趣味だったこの人物らしい足跡である。

もともと彼は各地の風俗を見るだけでなく、農村の家屋の造りや小川の配置から農業社会を考え、女性の装いから都市の構造を思考した。つまり社会学者、民俗学者、考現学者でもあった。

それによると、和服姿は男性が三三%であったのに対し、女性はわずかに一%に過ぎなかった。また往来する女性八百十六人のうち、髪型が洋風だったのは三百四十四人で四二・一%だった。ということは、丸髷や島田、銀杏透し、束髪など和風の髪型に洋装という女性が半数以上だったことを示している。女性のファッションもまた、和洋折衷であった。

一九二二年（大正十一）の秋、東京で平和記念東京博覧会が開催された。そのとき建築学会の手で初めてモデル住宅というものが作られた。こんにちの住宅展示場の原型をなすものであって、庶民にとって縁遠い存在だった洋風的生活スタイルが、手を伸ばせば届くところに近づいた。

建坪は二十坪以下、坪単価は二百円以内、居間・客間・食堂は椅子とテーブル、台所にはシステム・キッチンというのが耳目を集めた。

同じ年、早稲田大学教授の山本忠興は、東京・目白に七百坪の土地を買い求め、水道以外すべてを電気でまかなう実験的な住宅「電気の家」を建設した。設計は従兄弟で住宅設計家の先駆をなした山本拙郎であった。

玄関のドアも電気で開閉し、湯沸かし器、フットウォーマー、電気掃除機、パルコレクター、トースター、電気アイロン、電気ミシン、電気オーブン、電気洗濯機、扇風機、電気ストーブなど、すべてアメリカのウエスチングハウス社から輸入した家電製品が揃えられた。

電気オーブンだけで六百五十円もした。電化製品の合計額は庶民の家が一軒や二軒は建つ金額であったと伝えられる。

外見は洋館であり、中に入っても床は板張り、椅子とテーブルの生活というのが前提だったが、であるにもかかわらず、電気座布団が用意され、台所には竈（かまど）が設置され、部屋には畳が詰め敷かれたというのが、いかにも和洋折衷である。

補注

国立歴史民俗博物館 歴博・千葉県佐倉市城内町一七。大学共同利用機関法人人間文化研究機構の一組織として一九八三年に設立された。同博物館のホームページによると、事業は①研究②情報提供③一般公衆に対する教育④資料の収集・制作・保管⑤大学院教育等への協力⑥国際交流が挙げられている。

このうち研究活動では「日本の歴史及び文化を実証的に解明することを目標とし、歴史・考古・民俗資料を系統的に収集・整備し、これらの資料に基づき、歴史・考古・民俗及び情報資料の各研究系が相互に連携、協力しつつ、関係分野の研究を推進すると共に、全国の大学等の研究者の参画を得て、専門を異にする複数の研究者が共通研究課題のもとにプロジェクトを組織して、共同研究を行います」とある。

弥生時代の年代に関する発表 国立歴史民俗博物館二〇〇三年十二月発表資料「弥生時代の実年代」（二〇〇三年度の炭素¹⁴C年代の調査）藤尾慎一郎、「弥生時代の実年代」春成秀爾、「青銅器からみた弥生時代の実年代」宮本一夫、「世界のAMS研究の現状と課題」今村峯雄）。

井上光貞 いのうえ・みつさだ/1917~1983。東京都に生まれ四二年東京帝国大学国史学科を出た。坂本太郎、和辻哲郎に師事し六一年東大助教、六七年教授。七九年退官し文化庁を経て八一年国立歴史民俗博物館館長となった。津田左右吉の文献批判を継承し実証主義的考察をもって日本古代史論を展開した。弥生の編年 「弥生」の名は一八八四年に東京・弥生町（現東京

大学構内）から有坂鋁蔵が文様が簡素でふっくらした形状の壺を発掘したことによる。その文様が山形紋であったことから、当初は「忠臣蔵」の考え方を提唱し、これを受けて三三年に森本六爾が刊行した『日本原始農業』で総合的な編年の基盤が固まった。

有坂鋁蔵 ありさか・しやうぞう/1868~1941。一八八七年九月、東京帝国大学工科大学に入り海軍技術学生（造兵学科一期生）となり一八九〇年フランスに留学した。海軍工廠で技術畑を歩み、一九三五年海軍造兵中将で退役した。考古学に関心があり、一八八四年三月、東京・本郷の向ヶ丘弥生町で発見した素焼きの壺が、のちに「弥生式土器」と呼ばれるようになった。

水稻耕作 国立歴史民俗博物館も前記発表に際して当然反論が予想されたため、「当博物館研究チームは水稻耕作の開始をもって弥生時代の始まりと考えている」とコメントしている。

生活遺跡 住居や集落など人々の生活の痕跡を残す遺跡。毎日の暮らしに使った土器や竈跡、貯蔵食料などが出土するばかりでなく、居住空間の広さから家族構成員数、住居の位置から集落における地位や機能、共同作業のありようなどを推測することができる。このほか遺跡には埋葬地、祭祀場、工房、農地などがある。

縄文時代の米 縄文時代に稲作が行われていたことを示す例として、縄文式土器につく糊痕がある。またいくつかの遺跡から炭化した米が発見されている。最も古い時代に属するのは青森県八戸市の風張遺跡から出土した七粒の炭化米である。放射性炭素による年代測定の結果、紀元前八百年前後という数値が出た。農具や栽培跡などは発見されていないが、住居跡から出土したこと、のちの時代の遺物が混入した形跡がないことなどから、国の重要文

化財に指定されている。

津軽平野の水田遺跡 バイパスの建設に際して、一九八一・二年の両年にわたって青森県津軽地方の田舎館村垂柳で総面積三九六八平方メートル、計六百五十六枚の弥生時代の水田跡が発掘された(垂柳遺跡)。水田はさらに広域に広がっていると推測され、現在は国指定史跡となっている。さらに一九八七年には弘前市砂沢で垂柳より三百年以上古い時代に属する水田跡が発見され、紀元前後ごろにこの地で広く水稻耕作が営まれていたことが確定した。また北緯四〇度以北の寒冷地に耐えうる品種改良が行われていたことも類推されている。

遺跡出土人骨の測定 金関丈夫『弥生時代人』(『日本の考古学』第三卷(「弥生時代」収録・一九六六・河出書房新社)。

鹿鳴館 一八八三年、東京の靴町区内幸山下町に総工費十八万円で建設された(「靴町」はのち「麴町」と表記。内幸山下町は元薩摩藩装束屋敷だった)。レンガ造り二階建て・建坪四百十坪、イタリア・ルネッサンス風にイギリス風を融合した洋館だった。設計したのはイタリア人建築家のジョサイア・コンドル (Joesiah Conder / 1805.2 ~ 1920) で、鹿鳴館のほか東京国立博物館(旧帝国博物館)、ニコライ堂、岩崎弥太郎邸などを手がけている。朝のテレビ小説『おはなはん』劇中、主人公の名は「浅尾はな」だった。モデルは林はな(原作者・林謙一の母)とされる。**マドンナ** 小説『坊ちゃん』中では、「遠山」という苗字だけで名前は示されていない。松山在住の軍人の家の娘「遠田ステ」がモデルとされる。

北沢楽天 きたざわ・らくてん / 1876 ~ 1955。本名「保次」。埼玉県に生まれ、福沢諭吉が主宰した時事新報に風刺漫画を

掲載した。一枚の絵で「おかしみ」を表現し、社会的な意味を持たせた功績は大きい。

今和次郎 こん・わじろう / 1888 ~ 1973。青森県弘前市に生まれた。早稲田大学建築学教授、日本建築士会会長、日本ユニホームセンター会長などを務めた。関東大震災後の都市住宅や服装について幅広い調査研究を行った。

新渡戸稲造 にとべ・いなぞう / 1862 ~ 1933。盛岡藩奥御勤定奉行の家に生まれた。初名は「稲之助」と言った。一八七一年叔父・太田時敏(1839 ~ 1915)の養子となって東京に出たとき、名を「稲造」に改めた。一八八四年米ジョンズ・ホプキンス大学に留学し、帰国後は札幌農学校、京都帝国大学法科大学、東京帝国大学農科大学、拓殖大学、東京女子大学などの教授を歴任した。

柳田國男 やなぎだ・くに お / 1875 ~ 1962。兵庫県で生まれ東京帝国大学法科大学政治科を出て農商務省に入った。東北の農村を調査研究するなかで民俗学に関心を持つようになり、『遠野物語』を著した。エスペラントの普及に努めたほか、一九四六年日本国憲法審議に参加した。

平和記念東京博覧会 東京府の主催で一九二二年三月十日から七月三十一日まで、上野公園で行われた。来場者は一百万人とされる。モデル住宅が建てられたのは「文化村」コーナーで、これが「文化住宅」の由来となった。

山本忠興 やまもと・ただおき / 1881 ~ 1951。高知県に生まれ、東京帝国大学を卒業して東京芝浦電気に入り、のち早稲田大学に移って電気工学部の創設に尽力した。電気学会会長、照明学会会長を歴任し、学生連連会長も兼任した。これが縁で第九回

アムステルダム・オリンピックの日本選手団総監督も務めた。
山本拙郎 やまもと・せつろう／1890～1944。住宅設計
施工会社「あめりか屋」設計部の技師長を経て、創業者・橋口信
助の死後、経営を担った。

日本IT書紀 029 和洋折衷

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
<http://www.ossaj.org/>
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。